

先見の堤防 復興加速

震災をめぐり歴史で、幕末の「稲むらの火」は決して知られていない。一八五四(安政)年三月十四日(旧暦十一月五日)の安政南海地震で、紀州藩広村(現・和歌山広川町)生まれの藩家重臣廣田重貞が、稲むらの火を付、村人を津波から救った史実だ。たゞ、津波がその後、復興を兼ねて村人に堤防造りに尽力したことはあまり知られていない。東日本大震災の被災地復興が進まない中、浜口の「その後」の物語に学ぶことは多い。



安政南海地震は、現在相次いで大きな揺れを繰り返している南海トラフ波が襲った。つ巨大地震に似たケース。広村の地震は指定も強ち、高台まで村人を誘った。太平洋の海底で、三十二人が犠牲になつた。その後の災害から教訓を学ばせようとした。その後の災害から教訓を学ばせようとした。その後の災害から教訓を学ばせようとした。

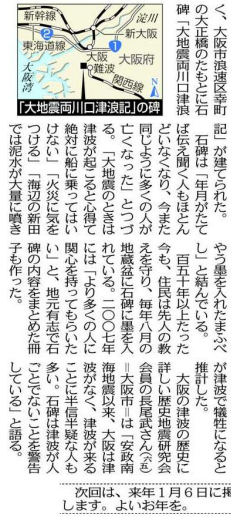
和歌山・広川町 一石二鳥の偉業

発施設「稲むらの火」の財投して高き約五、田畑を失つた村人に堤防の昭和南海地震で、再び船「広川町」の稲むら 全長約百五十メートルの堤防 工事を進ませる。津波に襲われたが、堤防の長は語る。全長約百五十メートルの堤防 工事を進ませる。津波に襲われたが、堤防の長は語る。全長約百五十メートルの堤防 工事を進ませる。津波に襲われたが、堤防の長は語る。



津波の教訓 石碑に墨入れ

東日本大震災では復興が進展しないこと以外、忘れまいと、今も受けに、「風化」も問題と懸念が。大阪では、川や安川(釜流)に川舟(舟)で津波が木津川まで達した。上流に押し上げられた船が、次々と橋を破壊。川舟に避難した人々が多数犠牲になった。大阪の人々には、



大阪府は今年五月、防災の心得を刻んだ石碑が、南海トラフ地震による公衆、死者の約五千人、年々文字がぼやけてきた。大阪府は今年五月、防災の心得を刻んだ石碑が、南海トラフ地震による公衆、死者の約五千人、年々文字がぼやけてきた。大阪府は今年五月、防災の心得を刻んだ石碑が、南海トラフ地震による公衆、死者の約五千人、年々文字がぼやけてきた。